発達支援コラム No.33

焼津市の通級指導教室（ことばの教室・まなびの教室）の担当者として、
多くの子ども達を支援してこられた荒井久美子先生に、特別支援教育で
大切にしたいことや、一人一人の特性に応じた支援のヒントについて、
わかりやすい言葉で書いていただきました。

「一人一人に合わせることの面白さ」

特別支援ときくと、何か難しそうだな、めんどくさそうだなとつい考えてしまいがちです。私も、はじめはそうでした。ところが、通級指導教室で毎日さまざまな特性を持つ子ども達と接しているうちに、「『特別支援』って、おもしろいな」と感じる場面に出会うようになってきました。

～お道具箱って必要？～

「集中力のない子」といわれているAさんです。

手いたずらが止まりません。これまでは授業中にお道具箱からはさみを出し、いたずらをしている姿を見つけると注意をしていました。はさみが好きで、授業に集中できなくなるとお道具箱の中のはさみに手が伸びてしまうのです。

ところが、教科書・ノート等はランドセルに入れっぱなしで、毎時間ロッカーへ教科書とノートを取りにいくのです。

そこで考えついたのが、「お道具箱を机の中に置いておかない作戦」です。授業に集中できなくなってきた時に、手を伸ばすと大好きなはさみがある。これはいい暇つぶしになってしまうのは必然です。ならば、必要な時に必要なものをロッカーへ取りにいき、持ってきたら使えるようにすればいい。お道具箱ごと移動してしまおうという方法です。

お道具箱の便利さはいろいろとあります。机の中の整頓ができる。小さな道具類がばらばらにならずにすむ。箱を引き出すことによって、机の中の物が一目瞭然である 等。お道具箱が机の中にあることが支援の一つにもなるけれど、お道具箱が机の中にあることがかえってマイナスになってしまうこともあるのだと気付きました。Aさんにとっては、「机の中はからっぽ」の状態にしておくことが一番の支援だったのではないでしょうか？

20～30 人の集団で生活や学習をする中では、一定のルールがあり、それに沿うよう求められることが多いです。大多数の子が不便に感じないルールであれば、それはルールとして成立していると判断されがちです。でも、集団の中には、大多数の中に入りきれない少数派もいることを忘れてはいけないと気付きました。
自分（大人自身）が便利・簡単…と感じることでも、人によっては実は不便で困難に感じることもあるということです。

今回、私がお伝えしたかったことは、一人一人に合わせることの難しさではありません。一人一人に合わせることのおもしろさです。「このやり方は〇〇さんには合ったが◇◇さんにはいまいちだったな。」「◇◇さんにはこうやってみよう。」「ほかにもこんなやり方がありそうだ。」と。いろいろな手段を考えることを面倒に思わないで、楽しんでもらえたら、「特別支援」って、身近な取り組みになっていくはずです。